

『六死人』について

福田 完治

1. はじめに

『六死人』はスタニスラス＝アンドレ・ステーマンの代表作と言われている。1931年に発表され、Masque叢書の第2回Le Grand Prix du Roman d'Aventuresを受賞した。

財産の山分けを約束した6人のグループが次々と殺されていくというストーリーは、実際にはプロットが大きく異なるにもかかわらず、しばしばアガサ・クリスティの『そして誰もいなくなった』の先駆をなす作品としても評価されることがある。

被害者および加害者を利害関係を共にするひとつのグループ内に限定し、そのなかで連続殺人事件を起こすという設定は、松村喜雄⁽¹⁾の指摘するように過去の推理小説でもしばしば使用されてきたものであるが、ステーマンの『六死人』の場合はその「よく使われる」設定を逆手にとった犯人を用意して効果をあげている。

しかし設定とトリックについては頻繁に引用されるこの作品の、全体の構造を分析したものはわれわれの知る限りはないようだ。そこで小論ではこの物語のうちトリック以外の部分の構造を明らかにするとともに、その根底に流れる小説としての特質を見いだすことを試みる。

以下では、まず小説の構造として全体の流れ（2）、各章の登場人物（3）を確認する。続いてそこから得られた結果を検討し（4）、この作品の小説としての特徴を明らかにしたい（5）。

2. 全体の構成

『六死人』は25の章で構成されていて、題名が示すように6つの殺人⁽²⁾が行われる。ただしひとつの殺人では死体は最後まで発見されない。また最後の殺人は警察官による犯人の射殺だ。

物語は殺人あるいは殺人につながる被害者の拉致という事件を小さなクライマックスとする6つの部分に分かれ、最後のクライマックスが犯人の射殺ということになる。ここでは各事件が物語全体の流れの中でどういう位置を占めているのかという点を検討する。

それぞれの部分がどういった章で構成されているかまとめると下のようになる。これら各部の最後の章で殺人（あるいは誘拐）事件が起こることになる。

	章	被害にあう人物	被害にあう状況
1	1	ナモット	船上で行方不明
2	2～5	ジェルニコ	銃撃（行方不明後に死体発見）
3	6～11	グリップ	刺殺
4	12～16	ティニョル	誘拐（後に射殺死体）
5	17～21	サンテール	射殺
6	22～24	ジェルニコ	射殺
	25	—	—

ひとつの事件までに費やされる章を見ると、導入部を別にすれば、第2の事件から第5の事件まではほぼ均等に配置されており、最後の部分だけがやや短

くなっているのがわかる。

次に各部分を具体的に見てみると、第1の事件は1章におかれている。ここでは6人の若者の関係や、物語の基となる約束事について紹介される。そしてその最後に第1の犠牲者として6人の内のひとりの死が告げられる。この部分はただひとつの章で語られることもあり、最後まで死体が出てこないこともあって物語のプロローグとして位置付けられる。

第1の事件の後、第2の事件が起こるまで物語はサンテールを中心に語られる。彼の回想から始まって、アスンシオンへの恋情、ジェルニコとの再会へと続く。この最後の場面でジェルニコが銃撃を受け第2の犠牲者となる。

第3部ではサンテールとアスンシオンとベルロンジュールのいわば三角関係が暗示され、同時に警察による捜査が始められる。最後に6人組第4の男グリブが登場し殺害される場面が用意されている。

第4部でも同じようにヴェンスの捜査とサンテールのアスンシオンへの愛情が語られる。最後にやっと登場する第5の人物ティニョルはそのまま犯人に誘拐されてしまう。

第5部では初めて探偵による調査の過程が詳しく描かれる。生き残った若者たちに対する尋問が行われ、その後に置かれたサンテールと犯人の対決がひとつのクライマックスとなっている。

最後の部分では物語が大きく動く。アスンシオンが誘拐され、その救出とヴェンスによる犯人の待ち伏せ射殺と続いて一挙に事件解決へと向うのだ。

第6部のあとにつけられた最後の25章はヴェンスによる謎解きで、いわばエピローグ的な役割と言ってよい。

こうして見てくると第4部までは、事件の後で常に描かれるのはサンテールの反応とヴェンスの調査だ。被害者は次々と変わっていくが、そのたびごとに必ず戻ってくるのは「サンテールはどうした」かであり、「ヴェンスはどうした」である。

全体の流れの中で、探偵役が物語を推進するのは推理小説では当然のことだが、ここでは同時に被害者グループのひとりであるサンテールも常に注目されている。これはいわば主人公としての扱われ方だといえる。

そこで次章ではさらに具体的に各章にどういう人物が登場するかを確認する。

3. 各章に登場する人物たち

『六死人』の主要登場人物は6人組の他にジェルニコの妻のアスンシオン、探偵役のヴェンスと予審判事のヴォグレールの合計9人だ。

しかしこの9人が同時に登場する場面はなく常に何人かが交互に現れるだけだ。しかも探偵以外の7人もその登場が同列に扱われるのではなく、人物によって大きな違いが見られる。大部分の場面に登場する人物もいれば、登場と同時に殺されたり、名前だけしか登場しない人物もいる。

この章では物語の各章に登場する人物を挙げてみて頻度を調べることにする。以下がその表だ。ただし上記主要人物以外は省略してある。

章	登場人物
1	サンテール, ペルロンジュール
2	サンテール
3	サンテール, アスンシオン, ジェルニコ
4	サンテール, アスンシオン, ジェルニコ
5	サンテール, アスンシオン, ジェルニコ
6	サンテール, アスンシオン, ジェルニコ, ペルロンジュール
7	予審判事, サンテール, アスンシオン, ヴェンス
8	ヴェンス, サンテール, アスンシオン
9	サンテール, アスンシオン, ペルロンジュール
10	グリッブ, 犯人

- 11 サンテール, ヴェンス, グリップ
 - 12 サンテール, ヴェンス, ペルロンジュール
 - 13 サンテール, アスンシオン, ペルロンジュール
(場面転換後) サンテール, ヴェンス
 - 14 サンテール, ヴェンス
 - 15 サンテール, ペルロンジュール
 - 16 サンテール, ヴェンス, ティニョル, 犯人
 - 17 予審判事, ヴェンス
 - 18 ヴェンス, アスンシオン
 - 19 ヴェンス, サンテール
 - 20 ヴェンス, ペルロンジュール
 - 21 サンテール, 犯人
 - 22 ヴェンス, 予審判事
 - 23 ペルロンジュール
 - 24 ヴェンス, アスンシオン
(場面転換後) ペルロンジュール, ヴェンス
 - 25 ヴェンス, ペルロンジュール, アスンシオン
- * 13章と24章には大きな場面転換がある。

以上のように21章の終わりで殺害されるまで、ほとんどの場面にサンテールが登場していることが分かる。しかもすでに見たように、多くの場合物語は彼の視点で語られ、アスンシオンへの愛情など彼の内面の葛藤がしばしば描かれる。事件と直接関係のない私生活が唯一描かれるのがサンテールなのだ。

明確に犯罪が行われる5章までは、警察が描かれていないのは当然のことだが、いったん探偵役のヴェンスが登場してからも、サンテールの登場する頻度は変っていない。ヴェンスの捜査についても17, 18, 20章における個別の話合いおよび尋問の場面を除けば常にサンテール同席のもとでのことだ。

終盤で殺されてしまうとはいえ、頻度の上からもサンテールは立派な主人公と言える。

4. サンテールが主人公

以上ふたつの点から物語全体を眺めてみると、最も主要な人物はサンテールということができる。すなわちグループ内の犯罪を扱ったストーリーではあるが、6人を平等にあつかったものではない。グループのメンバーの待遇に傾斜が見られるのだ。それは全員が一度に顔をあわせることなく物語が進むことでも明らかである。

また探偵役のヴェンスの捜査も前述のようにサンテール同席で行われることがしばしばで、それ以外の描写はほとんど見られない。密室殺人とでもいうべき12章でのグリップ殺害の捜査でも、用意された謎はすぐその場で説明されてしまう。

「ヴェンスもな！」とサンテールは駆け出しながら叫んだ。

「ヴェンスもか……彼にそう言ってやるよ」⁽³⁾

このように15章でティニオルのもとに駆けつける場面でも、主役はサンテールとベルロンジュールでありヴェンスはいわばついでに呼ばれる立場にすぎない。

こうしてヴェンスを脇役に、サンテールを主人公として扱ってきたが故に、彼が21章で殺された後は物語は結末に向けて加速せざるを得ない。それまでは事件と平行して描かれてきたサンテールの個人的な描写が無くなることで第6部の分量は少なくならざるを得なかったのだ。

この作品のように閉じた輪の中の犯罪を扱う物語では、通常「次は誰か」「犯人は誰か」という点で仲間の間に不安と疑いが生まれる過程が描かれる。メンバーの人数が減ってくるに依じて、生き残った人物の間の緊張が高まるのだが、この作品ではそうした常套手段は見られない。

17章では生き残ったサンテールとベルロンジュールのどちらかが犯人ではという仮定がヴェンスの口から語られるが、その直後にはサンテールを通してこう語らせている。

『ほくにはそれが、ほくではないと信じるに足る立派な理由がある』とサンテールは考えた。

『そしてそれがベルロンジュールでもないという、やはり立派な理由もあるのだ!』⁽⁴⁾

犠牲者はいわば一人ずつ紹介され、それと同時に犯人の手により殺され、あるいは拉致されてしまう。自分たちのグループ内で連続殺人が行われているということを知らないまま殺されるものもいる。読者にとっても次の被害者は誰かと考慮する余地はほとんど残されていない。

この点は同様の設定の他の作品と決定的に異なるところで、よく比較される『そして誰もいなくなった』にしても犯人のトリックは別にすれば全く違った作品になっている。

『六死人』はあくまで「次は誰か」という緊張感あるいは意外性を切捨てた展開になっているのだ。ではこうした構造の物語でサンテールが主人公であるということは何を意味するのであろうか。次章ではこの点について考えてみたい。

5. 被害者が主人公

サンテールは第5の犠牲者として殺されることになる。これはすなわち被害者が主人公ということになる。『六死人』は探偵の謎の解明に主眼を置く小説ではなく、運命に翻弄される主人公の姿を描いていると言える。前述の言い方を用いれば「犯人は誰か」ではなく「彼はどうなる」という記述に力点が置かれているのだ。

こうした被害者を中心にしたタイプの小説はボワロ＝ナルスジャック⁽⁵⁾が分類しているようにサスペンス小説とすることができる。探偵が懸命に謎の解明に努力しているにもかかわらず、作者の目は一貫してサンテールすなわち被害者に据えられている。

そして『六死人』をサスペンス小説として考えると、ステーマンが捜索活動の後期になって「サスペンス風の味つけが濃くなる」という松村⁽⁶⁾の指摘も当然のことと考えられる。

6. おわりに

われわれは『六死人』のストーリーを構成を、登場人物に着目して検討してきた。ここでは「探偵」の小説としての体裁をとりながらも、「被害者」のひとりを物語の推進役とすることで、外見と違った骨組みを確認することになった。

ステーマンは終始トリックにこだわり続けた作家だったが、トリック小説として代表作にあげられる『六死人』でさえ、そのプロットの組み立てにはサスペンス小説としての素地が見えかくれしているのだ。

以上小論では推理小説を主人公の占める立場を中心に分析した。もとより娯楽のための小説として、読者の注意を引き付けることを念頭においた推理小説というジャンルは、その構造においてもさまざまな工夫が凝らされていることが多い。ここではふれる余裕がなかったが、物語を記述する上で作者が用意す

る工夫、小説技法については今後の研究課題としたい。

テキスト

スタニスラス＝アンドレ・ステーマン著，三輪秀彦訳，「六死人」，東京創元社，1984.

注

- (1) 松村喜雄，「怪盗対名探偵 フランス・ミステリーの歴史」，昭文社，1985.
- (2) ステーマンは『六死人』という題名にすでにトリックをしかけている．6つの殺人の犠牲者が全員6人組のメンバーというわけではない．
- (3) 「六死人」P.135
- (4) ibid. P.184
- (5) ボワロ＝ナルスジャック著，篠田勝英訳，「探偵小説」，白水社，1977.
- (6) 「怪盗対名探偵 フランス・ミステリーの歴史」P.274

(博士課程後期課程修了)